



「ローズオイル」要約版

(原題 : Rose oils - variations on theme)

Dr Wladislaw Brud

Dr Iwona Konopacka-Brud

王者

世界中の調香師にとってブルガリアのローズオイルは唯一無二の存在。ただこのオイルは採油率が非常に低く、常時品不足状態のため、市場にはトルコ、モロッコ、フランス、ロシア、中国、インドなど多数の他原産のローズオイルが出回っているというのが現状です。ブルガリア産に最も近いとされるのは同じ原植物からつくられているトルコ産。モロッコ産とロシア産も市場に出回っていますが、それらは、純正であってもブレンドされていてもローズオイルと呼ばれています。香水業界においては、最新の分析方法によってオイルの質や産地を特定することはできますが、アロマセラピー用のローズオイルをディーラーが品質テストをするという機会はほとんどありません。

オイルの原産地が明記されていても、必ずしも純正、無添加のオイルを保証するものではないことも知っておくべきです。なぜならば、栽培地、生産年、蒸留の装置・技術等の違いにより品質の差が生じるからです。ここにブルガリア産と2種のトルコ産オイルを中国産ローズオイルと比較した分析データがあります。同一タイプのローズオイル間でも、嗅覚的に重要な多くの成分の含有量に明らかな違いがあることを示しています。

cis-ローズオキシドとノナノールは 0.10~0.43%、シトロネロールは 28.20~45.04%、ゲラニオールとネロールは 11.87~26.33%、リナロールは 0.54~2.18%、というように幅生じています。また、真空ヘッドスペース法により濃縮採取した、同一産地で栽培年の違う2つのロサ・ダマセナ “ローズ・ド・レッシュ” の成分組成の違いは、植物の香気成分がその年の天候に左右されて異なる組成となることも示しています。

微量成分支配

同一地域に生育する同種の植物間における成分組成差は、時として産地の違うオイル同士よりも大きくなる場合があります。精油の香りや、薬理作用は主要成分の量により決まるのではなく、おそらく極めて少量ながらも強力な微量成分が決定付けているものと思わ

れます。

1978年にG. Ohloffが公表した資料によると、ローズオイルの独特な芳香に影響を及ぼす様々な成分に関して、次のように述べています。ローズオイルの典型的な芳香は、非常に低い閾値をもつ1つの微量成分、ダマセノンにより決定付けられ、それは他の成分が芳香に対して相対的に寄与していないと思われるほどである、と。においの閾値とは香気分子に対する受容体の感受性機能のことを言います。

精油に含まれる個別成分の治療的活性について発表された論文は殆どなく、個々の成分の相乗的特性を全て含有する混合物（つまり精油）のみが実質効果を有しているというのが通説であり経験則となっています。とはいっても精油が持っている非常に強い有効作用は、個々の成分に依存しています。主要成分も微量成分もオイル中の割合は一様でないという事を考慮すると、比較可能な一般特性について各オイルはその原産地や栽培年度により作用に若干差異があると結論付けることができます。

偽和

ISO9842は、ローズオイルを *Rosa damascenea P. Miller* から抽出されたものと規定していますが、大半のローズオイルはバラの香気成分を有する化学香料をベースとしているか、低品質の天然オイルを添加しています。ローズオイルにおける全主成分（シトロネロール、ゲラニオール、ネロール、フェニチルアルコール）といくつかの重要微量成分、これらの誘導体などは、テルペン加工や他のより廉価な精油から精製することができます。

適正な異性体や純度を有し、天然成分と完全同等な、いわゆる“ネイチャーアイデンティカル”と言われるそれらは、天然ローズオイルの成分組成や香りを標準規格に合わせたり、合成オイル（＝偽和品）製造用に使われています。様々な合成または調合“ローズオイル”は、低級な天然オイルとネイチャーアイデンティカル又は標準的香料化学品を基に、ベース及び成分組成が市場で取引されています。それらは、密度、屈曲率、極性のような通常の検査指標において天然オイルと同じになるよう作られています。精密なガスクロマトグラフィーと、その他の分析法、および経験豊富な分析スタッフによってのみ違いを見いだすことができます。合成（再構成）オイルが本物のオイルに混ぜ物として使われるとその判別は一段と困難になります。